

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

寧夏同心の貧困と回族の移動

著者	小島 泰雄
雑誌名	研究年報
巻	45
ページ	1-23
発行年	2008-12-22
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00000366/



寧夏同心の貧困と回族の移動

小 島 泰 雄

1. 同心回族の貧困

寧夏回族自治区の省都である銀川市から南へ、高速道路を走ると2時間あまりで同心県に着く¹⁾。過剰にも思える都市建設が進められている銀川と、回族が暮らす同心の農村が時空を共にしていることを想起するには、かなりの地理的想像力が求められる。それほど同心回族農村には貧困がありふれている。

同心県の農民の1人あたり平均収入は1900元（2006年）で²⁾、寧夏回族自治区平均の2760元の7割、全国平均の3587元のはぼ半分にすぎない³⁾。また銀川の都市住民の平均収入は10067元であり、同心農民のその5倍あまりとなっている。地域的な差異と都市農村の区別がもたらす二重の格差を理解することが、銀川市と同心県でそれぞれ繰りひろげられている暮らしを、同一の時空に置き直すために必要となる。

ただし同心回族農村の人びとが悲壮感の中で生きていると考えるのは、外部者のセンチメンタリズムでしかない。住民によって放棄された集落に居残るおばあさんと孫娘は、古びた窑洞の前に花壇をつくり美しい花をめでている。放課後の小学校を出てゆく子どもたちの数は多く、遊びながら家路につく彼らは元気潑刺としている。

ここで問題にすべきは、同心回族農村のありふれた貧困がそこに生きる人びとの暮らしを制約している機構あるいは構造であろう。既存の研究はそれらをどこ

¹⁾ 同心におけるフィールド調査は2007年8月に9日間行われた。カウンターパートの馬平先生（寧夏社会科学院）をはじめ、同行した中国と日本の研究者、さらに同心の方々にお世話になった。記して謝意を表します。

²⁾ 《同心県経済要情手冊 2007》同心県統計局、2007年、94p。

³⁾ 国家统计局編《中国統計摘要 2007》中国統計出版社、2007年、p.126。

まで解明しているのであろうか。

中国のマクロな地域格差を研究してきた林燕平は、寧夏南部の固原地区における回族村落のフィールド調査に基づいて、環境要因の大きさ、現金収入の少なさ、人口圧力の大きさ、教育の整備の遅れを、地域的な貧困と関連づけている⁴⁾。

寧夏と交流を続けてきた島根大学の研究者が編んだ論文集では、寧夏農村の貧困とその解決策について具体的な議論が展開されている⁵⁾。陳育寧は、黄河の水を利用する灌漑施設が整った北部の川区と南部の山区との間に存在する寧夏内部の格差について概観し、自然環境、工業化、教育水準、思考様式という4つの領域における差異が、山区の貧困を生み出してきたことを指摘する⁶⁾。また北川泉は、農家経済のパネル調査から、農業の集約化と兼業による農外収入の増加を、貧困から脱却する機構として重視している⁷⁾。

また、寧夏回族の人間と自然の関係について考察した陳忠祥等は、元・明朝期から始まる人口流入と農業開発による植生破壊の進行と、乾燥地域ゆえの自然の脆弱性が、人口－環境－貧困の三者によって構成される負のフィードバックを生み出してきたとする⁸⁾。

これらの研究が共通して指摘するのは、農業中国と牧畜中国の境界に位置する寧夏の自然環境と結びついた貧困である。それは農業には適さない乾燥した環境の下で、多くの人口が暮らしている現状そのものが、自律的な発展を難しくしているという理解である。

それならばなぜ、そのような過酷な場所に同心の回族は暮らすようになったのであろうか。そして地域開発が困難であるとしたら、何が貧困の対策となりうる

4) 林燕平「貧困地域発展の方向－固原市山間村から見る」西川潤・潘季・蔡艷芝編『中国の西部開発と持続可能な発展－開発と環境保全の両立をめざして』（同友社、2006年）所収。177-205頁。

5) 保母武彦・陳育寧『中国農村の貧困克服と環境再生－寧夏回族自治区からの報告』花伝社、2008年、302頁。

6) 陳育寧「寧夏地域経済の二元性と発達の後れた地域の発展」同上書、13-25頁。

7) 北川泉「農家所得の構造と新しい就労機会の創造」同上書、57-80頁。

8) 陳忠祥・沙愛霞・馬海龍《寧夏回族社区人地關係研究》寧夏人民出版社、2007年、315p。

のかであろうか。小論は「移動」という概念を用いることで、貧困の原因と対策に関わる問いを横断して考えてゆきたい⁹⁾。

2. 窯山の暮らし

同心回族農村の貧困について、分析に入る前に、ある老農民の話を紹介しよう。彼は民国22年（1933年）に生まれ、同心県で最も貧しい地区とされる窯山で暮らしてきた。

民国期の彼の家は商業に従事することなく、雑穀中心の農業を営んでいた。6人の子どもを抱えた父親は限られた農地で、キビ（糜子）やアワ（谷子）、ジャガイモ（山芋・馬鈴薯）、小麦、ソバ（蕎麦）を作っていた。窯山では旱魃のためにほとんど収穫できないことも珍しくなく、そんな不作の年には、寧夏南部の固原あたりへ“逃荒”（飢饉を逃れるための流浪）や出稼ぎをしてしのいでいた。

北に20kmほど離れた羅山の新莊子から嫁いできた妻とは、集団化期に動員された共同作業の際に知り合い、1959年に結婚した。結婚式では地軟（藻類の一種）の入った“糊湯子”一杯を振舞うことしかできなかった。当時は食糧難で、腹一杯食べることができず、ジャガイモの葉や茎、草を臼でひいて食べていた。何人もの村人が亡くなった。

結婚の翌年に4室からなるいまの窑洞を掘り、下方にあった窑洞から引っ越してきた。1961年に砂利道が開通するまで、50里（25km）の道のりである県城までは歩いて5時間ほどかかっていた。

人民公社の下では1人3分（2a）の農地が自留地として配分され、ジャガイモを作り家族で食べていた。生産請負制が施行された際に27畝（1.8ha）が配分された。当時は家族11人だった。その後、荒れ地を40～50畝ほど開墾した。小麦とエンドウ（豌豆）を主に作るが、この3年は厳しい旱魃のために収穫がない。現

⁹⁾ 小論は、科研報告書（石原潤・馬平・秋山元秀・高橋健太郎編『寧夏回族自治区の経済と文化』奈良大学文学部地理学科、2008年）所載の「移動から考える同心県の回族」（pp.34-47）を一部改変したものである。

在はジャガイモを2、3畝ほど作っている。五月までに雨が降らないと小麦は実らず、今年の七、八月に降った雨は来年に向けての保水作業が行われる。耕起は平地は機械を雇い、丘陵はロバを雇う。

普段、ジャガイモを入れたキビ飯(黄米飯)とニラの漬け物を食べている。1964年以降にはキビ飯に米を混ぜるようになった。1人1日1斤(500g)のキビ飯を食べるためには、年に500斤ほどの収穫が必要になり、平年作で換算すると5畝の農地が必要となる。肉は月に2度ほど、1人1両(50g)、多いときは半斤食べる。暮らし向きの良い家では月に3～5回、肉を食べるが、貧しい家では1～2回にとどまる。

4人の息子はいずれも同じ村に住むが、娘は2人が北に40kmの所にある紅寺堡の開発区に、ほかに県城と東に30kmほどの馬家高荘にそれぞれ1人がいる。いまは農業より出稼ぎによる収入の方が多く、アホン(イスラームの宗教指導者)をしている四男も出稼ぎにいったことがある。不作の年はみな出稼ぎに行くが、通常でも村からは20～30人が出稼ぎに行っている。多くは若者で内モンゴルや天津で建設労働に従事している。子どものいない女性も出稼ぎに行くことがある。

羊3頭と鶏4羽を飼っている。牛は買付業者に2900円で売ったところである。“退耕還林”は2002年に始まり、1人2畝が割り当てられ、1年目には200斤の食糧が対価とされた。2年目からはトウモロコシと小麦が30斤ずつと98元が対価とされている。窯山の農民にとって退耕還林は、安定した収入となり、また出稼ぎの時間ができるので、ありがたい制度である。“封山禁牧”は1畝4元が補償金で、30畝を供出し100元ほどを得た。マメ科の灌木である樺条(カラガナ)が多く植えられている。以前は10～20頭の羊を飼っていたが、2003年から取り締まりが厳しくなり、放牧できなくなった。

1998年に集落を通る道路はアスファルト舗装されたが、県城までは乗り合い三輪を使って往復10元かかる。近くに衛生院もなく、病院に行くのが不便である。また学校も代用教員が教えており質がよくない。井戸はなく、水窖に雨水を溜め

て使っている。雨が降らなければ飲用水さえ確保できず、県城で水を1立方mあたり5円で買い、80～90元払って農車で運んでもらうことになる。この村は主要道路に面しているので“吊莊”（集落移住）の対象となっていないが、2、3戸の農家がコネを使って黄河の揚水灌漑が到達した河西郷に移っていった。また新しい開発区の紅寺堡へも4、5戸が自発的に移った。自分も山を下りたいと思っている。

老農民の語りには、同心回族農村にありふれている貧しさとたくましさを、ともに見いだすことができる。

3. フィールド

寧夏回族自治区は、黄河に沿って延びる北部の川区と、六盤山につらなる南部の山区、そして両者の中間にひろがる乾燥区に大きく3分される。同心県はその中部乾燥区に属する。降水は夏雨型で、年平均降水量は272.6mmと少ない¹⁰⁾。降水は年ごとの変動が大きく、かつ少雨の年が多い。我々が訪ねた2007年の夏は比較的雨が多かったが、春までは数年連続の旱魃の被害を受けていた。

海拔1400mほどの同心県城は、年平均気温が8.6℃、最暖月（七月）の平均気温は22.8℃、最寒月（一月）は－8.1℃で、四季が明瞭である。地形的には県城の東南部が黄土高原に属し、県城などのある西北部が黄河支流の清水河の河谷と丘陵部からなる。最高所は北部の羅山で2624mである。

同心県の沿革はやや複雑である。前漢に三水県が置かれたのが行政区画としての始まりであり歴史は古いが、三国時代に廃されて北魏時代には固原の管轄下に置かれる。唐代中期以降には吐蕃や西夏といった非漢族王朝の支配地となる。元代に寧夏府路が置かれ、明代には王府の牧地となっている。清代の同治年間に左宗棠が回民起義を鎮圧して平遠県が設けられ、下馬関が県城となった。民国3年

¹⁰⁾ 同心の概況については県志を参考とした。同心県志編纂委員会編《同心県志》寧夏人民出版社、1995年、862p.

(1914)に鎮戎県、民国17年(1928)に豫旺県とそれぞれ改名されている。民国18年(1929)に甘肅省から寧夏道が分けられて寧夏省となり、その管轄下に入った。1936年に共産党軍の西征により豫旺県ソビエト政府と豫海県回族自治区が成立したが、民国27年(1938)に国民党政府が奪還した。その際、下馬関から同心城に県城が移され、同心県と改名された。

三国時代から清末までの1600年間にわたって王朝支配の基礎をなす県が置かれず、唐代からは非漢族の支配を受け、明代には牧地とされてきたこと、そして同心県が行政領域としては100年あまりの歴史しかもたないことは、この地域が漢族世界と非漢族世界の境界に位置してきたことを教える。

同心県の人口339,877人(2006年)のうち、回族が全体の84%(285,997人)を占める。寧夏回族自治区全体の回族比率35%を大きく上回り、かつ全自治区において最も回族比率の高い県となっている。窯山に暮らす住民はほぼ全員が回族で、人口19,244人のうち2人が漢族で残りは回族とされている。その回族の歴史を簡単に振り返っておこう¹¹⁾。

同心県の回族の源流は元朝期に回回と呼ばれた人びとにあるとされる。13世紀にモンゴル軍が中央アジア、西アジアから連れてきたムスリムが定着したとする説と、イスラームに帰依したモンゴル人が定着したという説との2つの伝承がある。明朝初期には多くの回族がすでに定着しており、同心・豫旺・韋州の清真大寺はいずれも明朝初期に建てられたものである。さらに清代の同治年間のいわゆる回民起義の後、周辺の陝西・甘肅・寧夏・青海から回族が集まり、現在に至るとされる。

同心県の経済構成を県内生産額(2006年)からみると、第一次産業が2.6億元(23%)、第二次産業が4.1億元(35%)、第三次産業が4.8億元(42%)となっている。農業は小麦14万畝、トウモロコシ14万畝、ジャガイモ20万畝、ヒマワリ4万畝、スイカ6万畝が主な生産物である耕種農業の総生産額が3.1億元であるのに

¹¹⁾《同心県志》(1995年)巻11民族志(pp.653-715)による。

対し、牛5万頭、豚1万頭、羊44万頭、鶏25万羽からなる牧畜業の総生産額は2.1億元に上り、農牧複合がいまなお地域農業の実態であることを物語る。

同心県の農民の1人あたり平均収入は1900元（2006年）である。その収入構成をみると、家族経営の収入が943元、そのうち農業収入が489元、牧畜業収入が281元、第二・三次産業収入が173元であり、家計に占める第一次産業比率が高い。また、給与性収入は704元、そのうち出稼ぎによるものが530元を占めている。家族経営による収入が5.4%の伸びに止まるのに対して、給与性の収入は23.3%の急増を示している。収入増加が出稼ぎに依存する構造が明確になっており、統計的に把握されている数値として年間6.8万人が出稼ぎに行っている。

窯山は同心県の中央に位置し、窯山とよばれる黄土丘陵の上にひろがる地域である。最高所は2168mである。自然環境は厳しく、かつて国連のレポートで「人類の基本的生存条件を備えていない」場所とされたことがあると言われる。行政区画の再編成により、同心県に12ある郷鎮レベルの行政単位の一つである窯山管理委員会によって管理されている。13の村民委員会と51の村民小組からなる。

4. 農耕限界

窯山の暮らしは、農業と牧畜に生活の糧を求めながら、市場経済化の経済発展から取り残された貧困の中にある。それは農民1人あたり平均収入が1203元という、同心県の最下位の数値によって象徴的に示される。

農業生産額の変遷をみると¹²⁾、1950年代にはその4割から9割が牧畜業から得られていたが、集団化の時期に耕種農業の生産が拡大したことに比して、牧畜業の伸びは少なく、近年の牧畜業の生産額は農業生産額の3割から4割にとどまっている。

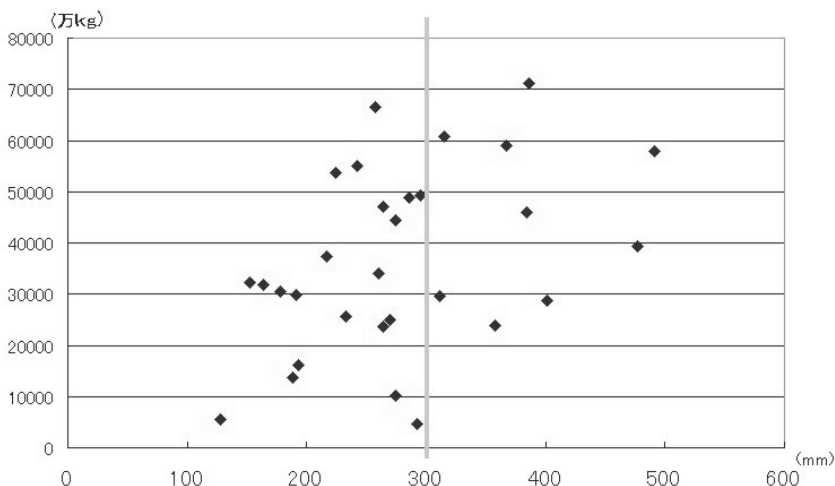
半農半牧の中で次第にその比重を高めてきた農業は、たびたび襲う旱魃のために多分に投機的な様相を示している。人びとは旱魃が頻繁に来襲するさまを“三

¹²⁾ 《同心県志》（1995年）、p.301。

年両頭旱，中間風沙愁，人畜辛苦勞，十種九不収”あるいは“大旱三六九，小旱年年有”と称する¹³⁾。農民の語りの中には、数年に一度、恵まれる雨によってもたらされる豊作で数年間食いつなぐ、というものがあつた。また登録された農地以外にも開墾された農地があり、広い面積に雑穀などを播種し、ただ収穫を待つという粗放的な経営が行われてきた。1985年に行われた土壌センサスの際に、衛星画像から推計された同心県の耕地面積は447万畝で、統計に載る146万畝と比べると、さらに2倍の登録されていない農地があることになる。

実際の農地と登録された農地の差は、中国一般に存在するものであるが、これだけの差があることは珍しい。不安定な降水に対応した投機的な経営を前提とした数値と解するのが正しいように思われる。しかもこの遺漏によっても、農民は最低限の生活水準を維持することで精一杯なのである。

さて、降水と農業生産の関係について、県志から年降水量の変遷と穀物生産量の変遷を比較したグラフが第1図である。



第1図 同心県の降水量と農業生産（1961-1990年）

¹³⁾ 李希《中国少数民族現状と発展調査研究叢書：同心県回族卷》民族出版社、1999年、p.7。

降水量と収穫量の間には、相関係数は0.4と限定的な数値にとどまるものの、関係性の存在が認められる。農業生産にとって雨は、総量である年降水量とともに降水の時期分布が関与するために、比較的少雨でも豊作、比較的多雨でも減収ということはありうるが、年降水量300mmを一つの境界としてグラフを見直すと、それより少雨の年には穀物の収穫量は総じて少なく、多雨の年には多くなるという傾向が明瞭に現れている。

年平均降水量が300mmに満たない同心県にあっては、この降水の年変動が大きく農業生産に影響をおよぼし、農民の暮らしはそれゆえ投機的な性格を有することとなる。本来的に安定を期待する農民にとって、もし彼らの生活が農業を前提とするならば、同心農村は望ましくない環境であり、それが継続してきたことにはなんらかの強制が働いたことを疑うべきであろう。すくなくとも人民共和国の定住政策の下では、下に述べる急速な人口増加によって、この不安定性が強化されたことは間違いない。

さらに歴史に目を向けると、清代までは放牧地とされてきたように、そしていまも半農半牧的な性格を保持しているように、同心農村の暮らしが農耕限界を越えて行われていることに注目すべきであろう。次にこの農耕限界を越えた暮らしの来歴を、回族の移動過程から検討してみたい。

5. 長期的移動

(1) 同心回族の源流

非漢族で、外来宗教であるイスラームを信仰する回族は、ある歴史時点において中国に來住したムスリムの子孫であるとされる。早くは宋朝期の貿易において東南沿海にやってきたイスラム商人をあげることができるが、現在の回族の主体は元朝の西方征服と支配体制における西域の人びとの重用とに結びつけて説明が行われている¹⁴⁾。

¹⁴⁾ 張承志『回教から見た中国—民族・宗教・国家』中公新書、1993年、192頁。

同心県志は同心に集住する回族について2つの源流を指摘する¹⁵⁾。一つは13世紀にモンゴル軍が中央アジア・西アジアを征服した際に連れ帰った、イスラームを信ずる兵士・職人・学者・人質が定着した、とするものである。もう一つはモンゴル人がイスラームに帰依して定住した、とするものである。

これらの源流について同心県志が示す根拠は、韋州城の蘇姓の人びとが伝える2つの伝承である。一つは明朝期に南京からやってきたという伝承であり、もう一つは元末にイスラームに帰依したモンゴル人の首領「蘇萊曼」の一字を取って姓としたとするものである。2つの伝承はともに数百年を経ており、その内容の具体性からしても伝説を越えるものではないと考えられる。

源流の議論を離れ、同心回族の集住史の考察に資する別の証拠として、明朝期に創られた清真寺がある。同心清真大寺は明初にチベット仏教寺院を改修してできたとされ、豫旺清真大寺は明の永楽年間（15世紀初）に建てられたものとされる。韋州清真大寺は明の万暦年間（16世紀末）に重修されており、明初の創建と考えられている。同心県を代表する清真寺がいずれも明朝期にその端を発し、かつ現在に連続していることが注目される。

同族レベルの記憶にもこの明朝期と結びつく伝承のあることが報告されている。同心城の馬姓は明初にやってきた官僚名家であるとされ、同心城の張姓は湖南宝慶を原籍とする祖先が明の天啓年間（17世紀前半）にアホンとしてやってきて定着したとする。また韋州の海姓は明の万暦年間に陝西咸陽からイスラームを伝えるためにやってきたとされる。

一族の来歴についての記憶が少ないのは、回族の祖先観を反映するものであるのか、あるいは同心回族の集住史を反映しているのかは明確ではない。ただ、源流からの流れといった単系的な歴史として通覧できるものでないことは確かである。それは清末に起こった回民起義とそれにとまなう断絶と更新を考えなければならないからである。

¹⁵⁾ 《同心県志》1995年、p.654。

(2) 回民起義

同治元年（1862）に陝西で始まった回族の清朝に対する反乱“回民起義”は、甘肅や新疆などの西北地区にひろがった。同心でもその年の夏には平遠所（現在の豫旺）で馬兆元が反旗を翻し、各地の回族が呼応して清朝軍との間で戦闘が繰り広げられた。馬兆元の反乱は年末には平定されたが、回族の反乱はその後も10年あまりにわたって続いた。《同心県志》には同心県が戦場となって回族軍と清朝軍が戦った様子が記されている¹⁶⁾。

回民起義の研究については、革命史観と結びついた農民反乱という枠組みから行われるものから、回族が民族的な抑圧への反抗として行った民族運動・民族戦争という枠組みを持つものへと重点が移行している¹⁷⁾。この研究視点の移行に伴い回民起義によって引き起こされた地域への影響についての研究にも進展が見られる。

陸文学は清朝期の寧夏における人口分布の変化について、18世紀に入りそれまでの軍事拠点を中心とした点状の分布から、人口増加による開墾が進み面的な分布へと転化したとし、回民起義以降は、北部から南部への回族の強制的な移住と、陝西などからの回族の流入によって、固原地区の回族が増加したとする¹⁸⁾。

侯春燕は、回民起義による人口減少とその後の推移を推計している。当時、寧夏が属していた甘肅で、人口は1500万人から470万人に激減したとして、その後の人口移動を5つに分類している。すなわち、戦乱を避けて批難していた人びとの帰郷、外地からの開拓民、兵士の定着、強制的に移住させられた回族、新疆に送られた罪人である¹⁹⁾。

¹⁶⁾ 《同心県志》 pp.691-694。

¹⁷⁾ 黄正林“清代黄河上游区域史研究的回顧与思考”寧夏大学学报（人文社会科学版）、2006・4、pp.65-75

¹⁸⁾ 陸文学“清代寧夏人口の地理分布及变化”固原師專学报（社会科学版）、26・2、2005、pp.34-37。

¹⁹⁾ 侯春燕“同治回民起義后西北地区人口遷移及影響”山西大学学报（哲学社会科学版）、1997・3、pp.68-72。

また侯春燕は、回民起義の発生の背景として、清朝期になって進んだ西北地区への開拓民の流入があるとする。その結果、人口と土地の関係が緊張し、回族と漢族の間での民族摩擦がひろがったとする²⁰⁾。

起義という概念が用いられることが示すように、回民起義は特定の史観と結びついており、中国においてはいまも解釈の自由度が限定されている。それは県志の記載の薄さや、研究論文における踏み込んだ記述の欠如にも看取される。起義史観を離れると、そこには回族と漢族の民族紛争という性格が浮かび上がってくる。陝西における状況を整理した黒岩高は、流言と虐殺が絡み合った様態を描き出している²¹⁾。

王朝権威の低下と社会不安によって発生した西北地域における民族紛争が、同心農村に大きな人口減少と新たな回族の流入という2つの要素を加えた。しかし19世紀後半に生じたこの回族の移動が、どの程度のものであり、またそれが現在の同心回族農村の貧困にいかに関連するかについては、なお解明すべき課題が多く残されている。

6. 20世紀後半の人口増加

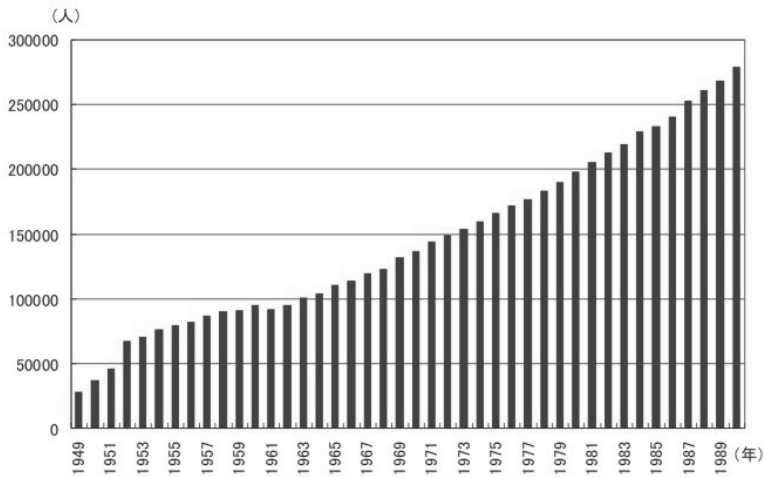
第2図から第4図は、同心県の人民共和國期における人口変遷とそれに関連するグラフである。

まず全体の傾向として、著しい人口増加が際だつ。同心県の総人口は1949年の2.8万人から1990年の27.9万人へ、ほぼ10倍になっている。同時期の中国全体の人口も2.1倍という大きな伸びを示すが、同心の人口増加はそれをはるかに凌駕している。

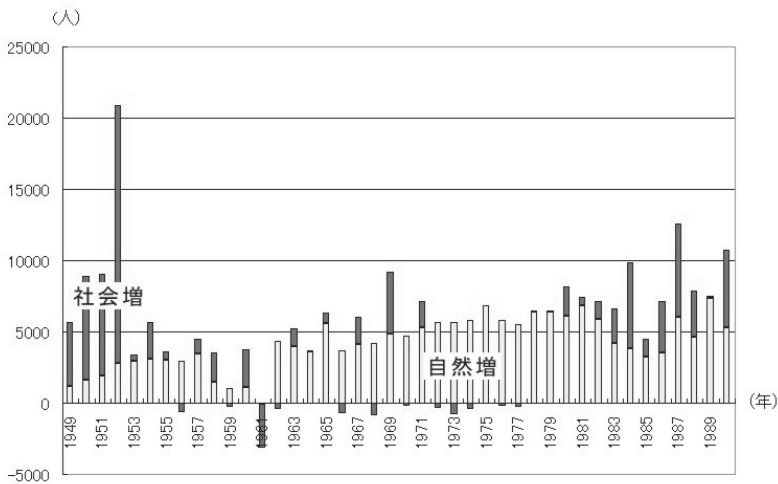
寧夏は人民共和國期に人口が最も増加した省区であり、1949年の119.7万人から1990年の465.5万人まで、3.9倍に増加している。しかし同心の数値はそれをも

²⁰⁾ 侯春燕 “近代西北地区回民起義前後の人口変遷” 中国地方志、2005・2、pp.49-53。

²¹⁾ 黒岩高 「械闘と謠言—十九世紀の陝西・渭河流域に見る漢・回関係と回民蜂起」 史学雑誌、111・9、2002年、61-83頁。

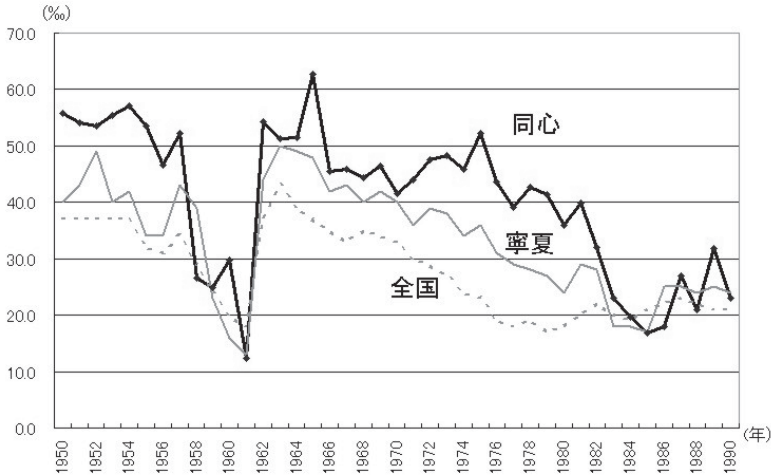


第2図 同心県の人口変遷（1949-1990年）



第3図 同心県の自然増と社会増の変遷（1949-1990年）

黒棒が社会増減、白棒が自然増減



第4図 同心県の出生率変遷（1949-1990年）

上回り、さらに倍以上の伸びを示している。寧夏において同心県の増加率を上回る県市は新たな工業都市建設が行われた石嘴市のみである。

この特異な人口増加はいかにして達成されたものであろうか。まず1949年から1952年までの4万人近くの増加が、同心県の増加率を誇張していることがわかる。このほとんどが社会増、すなわち人口流入によって実現されている。この点について《中国人口—寧夏分冊》に次のような解説がある²²⁾。「同心県は当時、一部が先に解放され、未解放地区の住民は馬鴻逵の腐敗した統治に耐えきれず、多くが解放区に逃げており、それゆえに1949年の人口数が縮小していた。解放後、とくに1950年から1952年にかけて逃れていた人びとの多くが戻ってきて家を建て、仕事を始めた。公安部門の回顧による統計では、同心県で解放前に逃亡し、解放後に戻ってきたものは少なくとも3万人とされる。」この解説においては国共内戦期の混乱が引き起こした人口流動とされるが、より長い時間軸で見ると、清朝末期から続く社会混乱の延長線上に置くことができる。

²²⁾ 常乃光編《中国人口—寧夏分冊》中国財政経済出版社、1988年、p.71。

同心県の人民共和國期の人口増加を1949年ではなく、この人口還流が終わる1952年の6.7万人と比較するならば、1990年の増加比は4.1倍に減じられる。この数値は寧夏の平均値に近づく。つぎに検討すべきはその増加の構造である。

当初は大きな人口流入が同心県の人口増加を牽引していたが、第3図が示すように、その後はいくつかの年次で社会増が立ち上がっているものの、基本的には自然増が人口増加に寄与していることがわかる²³⁾。自然増は出生数の増加と死亡数の低下によってもたらされるものであるが、第4図の出生率の変遷からは、同心県においては1970年代まで一貫して全国・寧夏よりすぐれて高い出生率を維持してきたことが指摘される。すなわち同心県の人口増加は、先行して低下した死亡率の一方で多くの子供が生まれ続けることにより達成された、いわゆる人口爆発と称される急増段階にあったのである。

すでに見たように同心県は黄河灌漑の行われる寧夏北部の川区、あるいは水環境が幾分緩和される南部の山区に比べて、乾燥度が高く、自然環境の厳しい中部乾燥区に属するが、人民共和國期においては、高い人口増加が主に高い出生率によって実現されてきたこととなる。このことについては《中国人口—寧夏分冊》において次のような解釈が行われている²⁴⁾。1982年の人口センサスによれば、川区の出生率は21.99‰であるのに対して、山区のそれは39.38‰とほぼ倍の値を示す。このように山区の女性の出生率が高くなるのは「早婚早育」、すなわち若年で結婚するために出産期間が長くなること、さらに教育水準が低いことが出生数を多くしているとする。

この解釈には回族という民族的な特徴は言及されていないが、川区の漢族比率が高いのに対して山区は回族比率が高いことから、この解釈の中に回族の出生率

²³⁾ 1953年以降の社会増の総和は1990年の総人口の16%、同期の自然増の4分の1であるが、人口構造から家族を拡大する時期にある移動した人びとが生み出した自然増もまた考慮に入れるならば、移動によって生み出された人口増加はより大きなものがあることに注意したい。その意味でも同心さらに寧夏は移住の影響を大きく受けた社会といえることができる。

²⁴⁾ 《中国人口—寧夏分冊》(1988年)、pp.73・74。

の高さが隠れているとみなすことも可能である。また同心県が寧夏における回族が最も集中している県であることは、上の同心県における人口増加率の高さと結びつくかもしれない。ただ回族の出生率の高さについて民族性に関連づけた言及はいまのところ未見である。

自然環境の劣悪な地域におけるこの人口増加は、地域の人口負荷を大きくすることとなった。人民共和国期に戸籍制度に象徴される定住政策がとられたことは、同心県の文脈に置き直すと、貧困の中にある人びとが、経済発展を越えた人口増加により、より貧困の度を深めるという循環を生み出したことになる。そしてその解決は、改革開放政策の下で始まる流動化と結びついてゆく。すなわち移動がふたたび重要となるのである。

7. 貧困対策としての移動

(1) 吊荘移民

寧夏の南部山地における貧困を解決するために政府が主導してきた移住政策が“吊荘”と呼ばれるものである。吊荘とは、寧夏の農民にとっては見知らぬ言葉ではなく、黄土高原において行われてきた出作に類する一つの農業経営方式を指す表現である。乾燥した荒れ地を広域にわたって開墾し、粗放的な経営を行う“広種薄収”と呼ばれる経営方式において、居住地から離れた農地に近接して臨時の住居をつくり、農繁期にはそこに住んで農業を行うことが行われており、それを“拉吊荘”と呼んできた²⁵⁾。

1つの農家が居住地と開発地の2つの場所に足場を持ちつつ、その間を振り子のように往復しながら農業開発を行う方式を、政策に応用したのが吊荘移民である。より具体的に言えば、従来の住居と農地を残しながら、開拓地にも住居と農地を持ち、開拓地での経営が安定して初めて移住する、という形をとる。安定を

²⁵⁾ 王朝良《吊荘式移民開発—回族地区生態移民基地創建与發展研究》中国社会科学出版社、2005年、pp.91-93。

重んじる農民心理からすると受け入れやすい移住形態である。そして同心農村はその最初の試みが行われた場所でもある。

1970年代後半から同心県において“揚黄工程”と称される黄河の揚水事業が始まり、灌漑可能地域への移住が行われたのがその始まりであった。県域内部の移住であるため、政府の管理の点からも、移民の適応に関しても、ともに良好な経過をたどり、比較的早く成果が現れたとされる。

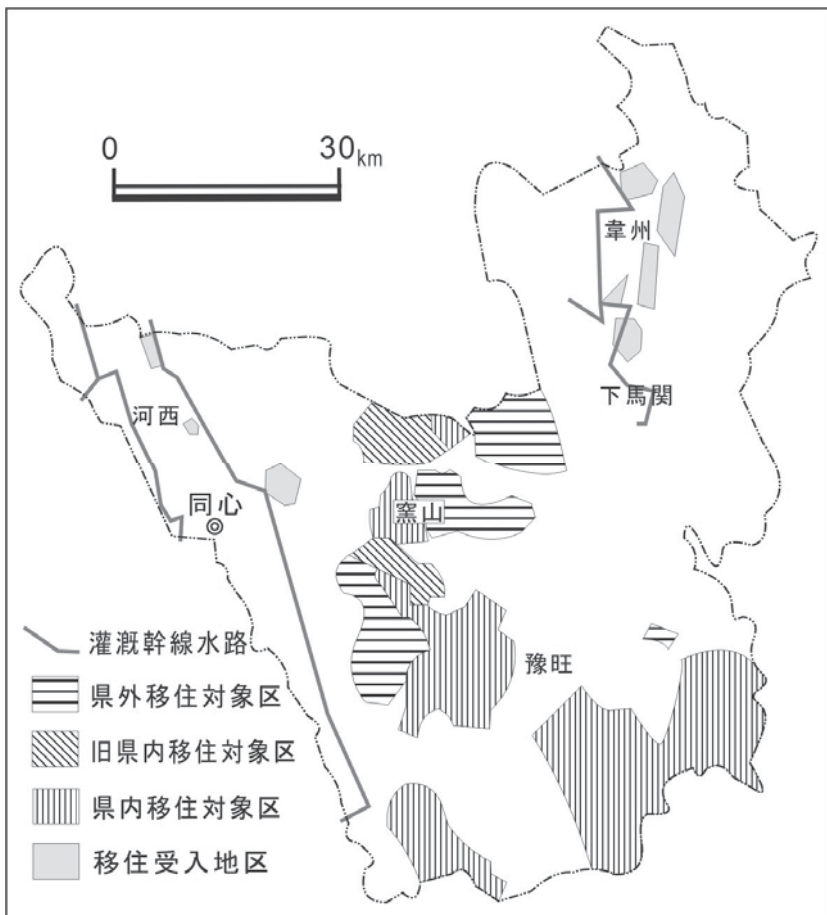
一方、長距離の移動を伴う県間の移住が、南部山区の貧困地域から、北部川区の新たな開墾地へと向かって行われてきた。こちらは250－500kmという長距離の移住であり、それに起因する自然環境と人文環境の差異を乗り越えるために、村や郷といった地域ごとに組織された集団での移住が進められてきた²⁶⁾。

同心県の吊荘移民の計画対象地域を表した第5図には、上記の2つの区分が送り出し地域ごとに区分されている。まず県内の移住については、県南部の山地を中心に送り出し地域が特定され、北部の黄河揚水が到達した地域に受け入れ地域が設定されている。この図に示された「移住受入地区」は、現在の計画対象である地域のみが示されており、早くから開発が進められた河西郷などの既存の移民を受け入れてきた地域は示されていない。また、同心県では2003年に大きな行政区画の変更が行われており、旧県域西部にあたる喊叫水郷に設定された開拓地への移民送り出し地域が県内移住と区別されて「旧県内移住対象区」と表記されているが、これは県域内部の移住と同等に考えることができる。窯山を含む県中部の山地には県外への移民送り出し地域が設定されている。

移民を送り出す地域の状況について、郷鎮政府廃止後の窯山に置かれた管理委員会で聞き取りを行った幹部の紹介に基づいて整理する。窯山には52の自然村があるが、5つの自然村について現在、吊荘移民が行われている。南関口村は県外の呉忠市の蘇家灘と紅寺堡へ、麦垛山・車路溝・紅湾梁・康家湾の4村は旧県内

²⁶⁾ 吊荘移民の概況については、李寧編《寧夏吊荘移民》民族出版社、2003年、とくにpp.203-266。

の中寧県喊叫水の馬塘地区へ移住することになっている。また山の西麓にある惠安村には窯山からも“少生戸”(一人っ子政策に従った農家)や“困難戸”(貧困世帯)である50戸が移住することになっており、秋には住み始めることになっていた。移住に伴う費用は、農民が1～2万元を負担する以外に、土地収用費と国家投資によって建物と農地が準備されている。政府の計画では、窯山に暮らしている人口の半分は吊荘移民として窯山を後にすることになっている。



第5図 同心県における吊荘

つぎに移民を受け入れる地域の状況について、県内の移住先の一つである上述の惠安村について整理してゆく。惠安村は窯山の西麓にある500戸の計画村落で、現代施設農業モデル地区にも指定されている。惠安という名前は福建省の県名からとられたもので、惠安県からの援助が開発の費用に充てられている。開発費用については、このほか国と省政府からの補助金、そして移住する農家が負担することになっている。これらさまざまな補助金の項目としては、福建省惠安県対口幫扶資金、寧夏扶貧揚黄灌溉工程項目、山区危窯危房改造項目、国家易地生態移民項目、塞上新居工程項目が挙げられている。集落の面積は1000畝、1戸あたり1.5畝の敷地と54平米の建物が統一的に建設されている。敷地が広く取られているのは家畜飼育が行われるためである。農地は集落の東側に6295畝の農地が開発され、黄河からの揚水灌溉を延長する施設が整えられると同時に、1戸あたり1畝の温室が園芸農業を目的として準備されている。惠安村を訪ねた時には、民政藍とよばれるライトブルーのラインの入った切り妻の家屋が規則正しく並ぶ集落部分についてはほぼ完成し、温室や灌溉水路などの農地部分の建設に力が入っていた。窯山の粗放的な経営を見てきた目には、そのコンパクトにまとまった集約的な経営への転換は劇的な変化に映る。惠安村へは、窯山のほか、県南部の豫旺、張家塬から移住してくることになっている。この場所は廟児嶺村の土地であり、開発地区の西側の平地には黄河揚水灌溉が届いている農地がひろがり、トウモロコシが豊かに実っていた。

寧夏で進められてきた吊荘移民は、生態移民という用語によって置き換えられようとしている。吊荘移民が担ってきた貧困対策という目的に加えて、移民を送り出すことで地域の人口を減少させ、それによって生態的な負荷を減らすという意図が前面にでるようになっている²⁷⁾。これは1998年の長江大水害をうけて退耕還林や封山育林といった政策が全国的に採用され、さらに西部大開発において総

²⁷⁾ 生態移民の批判的検討として、小長谷有紀・シンジルト・中尾正義編『中国の環境政策 生態移民－緑の大地、内モンゴルの砂漠化を防げるか？』昭和堂、2005年、311頁。

合的な生態環境の改善が重要な目的として盛り込まれる中で、2002年から寧夏で生態移民が実施されることになったものである²⁸⁾。

(2) 外出打工

政策的には“労務輸出”、生活感覚からは“外出打工”と呼ばれ、それに参加する人びとが“民工”と称されるところの出稼ぎは、戸籍制度に象徴される移動の制約が残る中国にあって、社会と経済の両面で進む近代化への農民的対応として、1990年頃からその重要性を次第に高めてきた。しかし寧夏にあっては出稼ぎの展開はゆっくりとしたもので、とくに回族にとっては宗教と結びついた生活という前提条件があることから、省区を越えた流動は限定的であった。

回族の集住地域である同心においても、その傾向は共有されてきたが、近代化の強い流れに生活様式が逆らうことは難しかったようである。第6図は同心県から県外への出稼ぎを省区別に示したものである。

同心県からの出稼ぎは6.8万人（2006年）とされる。これは同心農村の労働力15万人の45%にのぼる数である。回族が大部分をしめる同心農村にあって、すでに出稼ぎは一般的な選択となっている。このうち3万人は通年で出稼ぎしており、彼らの戸籍は同心県にあるが生活基盤はすでに同心県を離れている。

まずその行き先に注目してみよう。4割は寧夏内部において行われている。出稼ぎに近接性を求めること自体は、生活感覚からしても自然なことである。続いて25%が内モンゴル、17%が新疆となっており、同心回族の出稼ぎの空間的分布を特徴づける傾向となっている。内モンゴルは隣接する省区であるが、フホトの都市建設に多くの男性が出かけている。新疆は移住を通して歴史的に関係が深く、綿花の収穫作業に多くの女性が出かけている。青海（1%）・甘肅（2%）・陝西（1%）を含めて西北地区が同心の出稼ぎにおいて主要な空間的ひろがりとなっている。遠方への出稼ぎは他地域とそれほど大きく変わることはなく、北京

²⁸⁾ 桑敏蘭 “論寧夏の生存移民向生態移民の戦略転変” 生態経済、2004-S1、pp.23-25。



第6図 同心県からの出稼ぎ先

(1%)や浙江(3%)、福建(1%)、広東(0%)といった東部沿海の経済発展地域が目的地となっている。

出稼ぎは貧困地域の経済発展にとって重要な戦略となっており、“労務輸出”という概念の下に同心県政府も積極的な促進策をとっている。また仲介業者が発達し、“労務經紀人”と呼ばれる認定されたブローカーは同心県だけで700人にのぼる。同心滞在中も専用列車に乗って内モンゴルへ出稼ぎに行く人びとの出発式が駅前で盛大に行われていた。

同心出身者によって担われる特色のある出稼ぎとしてアラビア語通訳がある。小商品市場のある浙江省の義烏のほか、沿海部の広州、天津、北京などに2600人が行っており、そのうち通訳をしている者が700人ほどと推計されている。アラビア語の習得は清真寺で行われる以外に、専門の訓練学校が公立で1校、私立

で6校ある。アラビア語通訳のほかに、回族にとって有利な職としてイスラム料理の飲食業があり、5000人ほどが就業していると推計されている。

一方、回族には出稼ぎにとっては制約条件となる、宗教的な規制や生活習慣がある。とくに決まった手順を守って作られるイスラム料理が提供されなければ、生活を続けることができない。そのために建設現場を請け負う形態の出稼ぎでは、労働者だけでなく宗教者のアホンを同行することも行われている。分布論的には、南方や沿海部に出稼ぎに行く者が少ないことと、逆に西北地域の新疆や内モン古に行く者の多さにこの民族的条件が反映されているとみなされる。

8. おわりに

寧夏同心の回族農村にありふれている貧困について、その来歴と対策を、移動という概念を軸に考えてきた。この貧困が環境と人口の緊張関係の下にあること、具体的には、農耕限界を越えた農業開発と人口増加の地域内部化が貧困を生んでいることを確認したうえで、まず、貧困の来歴を回族の移動から検討した。

明朝期に創建された清真寺が語るように、同心の回族は長い居住史を有する。ただしその後の西北地域一帯で進んだ農業開発と清朝後期の社会不安とが交差する中で、19世紀半ば同治年間に発生した回族起義は、その居住史に不連続をもたらした。戦いに敗れた回族には、人口の減少に加えて周縁的な居住地への移動が強制された。乾燥の厳しい環境、さらに窯山のような黄土丘陵での暮らしは、この転換と切り離せないものであろう。そして社会主義建設期の定住政策は、急速に増加する人口を、その過酷な環境に縛りつけることとなった。

続いて小論は、貧困への対策を回族の移動から検討した。およそ近代国家としては貧困は放置しえないものであり、寧夏においては“吊荘”という、黄河揚水灌漑地区への移動という貧困対策が行われてきた。一方、1990年代後半から盛んになった出稼ぎは、回族独自の制約を内在しながらも、貧困の基本的構図を乗り越えていく個人的対応である。寧夏同心の貧困は、環境と人間の緊張関係に結び

つくことから、環境の改変と人間の減少との両面でその対策が進められることになる。前者が成帯的な気候という地球スケールの環境に規定される困難性を有することから、後者が貧困からの脱却への処方箋とならざるをえない。すなわち移動による人口減少が重要となる。

移動の歴史的考察から明らかなように、国家は同心回族の貧困に直接・間接の責任を負っている。退耕還林や黄河揚水に補助金が使われているのはその補償の一つとみなされるが、明らかに不足している。とくに移動できない人びと、出稼ぎに行けない40歳代以上の層や、移動予備軍である子どもたちへの対策が求められる。貧困の中でたくましく生きる人びとの生を支えることこそ、喫緊の課題である。

本研究は平成17-19年度科学研究費基盤研究(A)（課題番号17251010）および平成19-20年度科学研究費基盤研究(C)（課題番号19520684）による成果の一部である。